

「ホールが生んだ文化ボランティアの事例」

司会 ; では午前中に引き続き愉快的な事例報告にしたいと思います。

これから3つの事例を紹介していただきますが、持ち時間20分と少なく多少伸びることもあろうかと思いますがご協力をお願いします。

最初の北九州国際音楽祭の取り組みでは、本日のテーマは「ホールが生んだ文化ボランティアの事例」となっていますが、実は北九州国際音楽祭実行委員会、ここでのボランティア「ホールが生んだ」ではなく、「文化ボランティアがホールを生んだ」と言っているぐらい歴史のある取り組みです。では佐藤さんよろしくをお願いします。

「北九州国際音楽祭の取り組み」

北九州国際音楽祭実行委員会事務局

佐藤 友法氏

私は北九州国際音楽祭実行委員会事務局、北九州市芸術文化振興財団の佐藤と申します、どうぞよろしくお願ひ致します。

まず北九州国際音楽祭、ご存知ない方もいらっしゃると思いますので、北九州市音楽祭について説明させていただきます。北九州国際音楽祭は1988年に北九州市制25周年を記念して創設された音楽祭でございます。今年、北九州市が市制50周年を迎え、この音楽祭は今回26回目になります。創設当初よりTOTO株式会社様には多大なご支援をいただいていますとともに、文化庁さんにも助成金を頂きながら開催しています。このように26年の歴史をもつ北九州国際音楽祭ですが、創設当初と現在では形が大きく変わりました。開始から10年はフィンランド屈指の夏のフェスティバル「クフモ室内音楽祭」の姉妹版として提携して行われていました。その後11年目から、都市型の総合音楽祭として世界のトップアーティストを招き、教育プログラムも充実させながら今日に至っています。現在は毎年秋の、10月11月を中心に、北九州市立響ホールをメイン会場として「有料コンサート」「特別プログラム」「教育プログラム」「市民企画事業」の4つの事業を開催しています。

次に4つの事業を簡単にご説明いたします。

まず、「有料コンサート」これが音楽祭の中心となっているプログラムです。海外オーケストラと国内外のトップアーティストによる室内楽などの演奏会を開催しています。また当音楽祭オリジナル企画によるコンサートも毎年複数回実施して独自性を高めるとともに、良質な音楽を聴衆の皆さんに届けられるようなラインナップとしております。今年は10月6日から11月23日までの期間中に、8つのコンサートを実施しています。この「有料コンサート」におきまして、ボランティアのスタッフに当日業務やチケット販売にも協力していただいておりますが、このことは後ほどご説明いたします。

次に「特別プログラム」ですが、当音楽祭では出演アーティストの生の声や、ナビゲーターによる楽しいお話が聞けるトークショー、コンサート前のリハーサル見学、専門家による解説など、より音楽が楽しんでいただけるような親しみやすい企画を実施しています。

また入院中の方にも音楽を楽しんでいただけるように、本公演に出演するアーティストが、市内の病院を訪問してコンサートを行っています。先週チェロの宮田 さんが響ホールでリサイタルを開かれました。翌日に私立の医療センターを訪問してコンサートを実施しました。

病院等でコンサートをしますと毎回そうですが、入院中や外来の患者さん、ご家族はもちろん、忙しいお医者さん、看護師さん、病院スタッフの方等多くの方に毎回鑑賞していただいています。

次に「教育プログラム」ですが、午前中文化庁のお話にも、「子供達に鑑賞の機会を」というお話がありました様に、未来を担う子供達に音楽の素晴らしさを体験してもらい、情操豊かな人間形成の一助になることを目的に、本公演出演のアーティストが、子供達のためにコンサートを行っています。この時は小学生・中学生を学校や学年単位でホールに招いて行う「鑑賞教室」や、幼稚園や保育所に訪問して行う「訪問コンサート」があります。コンサートは演奏ばかりでは子供達飽きますので、演奏者とのトークも交えて楽しんでもらえるような内容にしています。保育所だからといって別にアンパンマンなどだけでなく、思いっきりカルメンを歌ったりしますが、子供達凄く楽しそうにノリノリで聴いてくれます。

最後「市民企画事業」ですが、これは市民有志の企画で公募します。市民の演奏家や地元で活躍する演奏家が出演するコンサートをホールや市民会館、あるいはショッピングモールといった公共スペースで行っています。これにも毎年多くの方にご参加をいただいています。

ここで少し北九州市立響ホールの紹介をさせていただきたいのですが、響ホールは北九州市の音楽専用ホールとして1993年に誕生いたしました。ということは今年で丁度開館20周年になります。響ホールは皆さんご存知でしょうか。名前の通りといいますか国内屈指の響の素晴らしいホールということで知られていまして、来場者だけでなく演奏したアーティストからも極めて高い評価をいただいております。座席数は720席ということで中規模のホールですが、室内楽に非常に適している他、ステージや客席を含めた空間面積が非常に大きいので小編成のオーケストラでも十分に対応が可能となっています。ホール開館20周年で音楽祭が26年目ということは、先ほど大澤さんからお話がありましたが、「ボランティアがホールを生んだ」ということはそういうことでございます。響ホールも当財団が管理運営をしまして、オリジナル企画によるコンサートや、招聘公演などの自主事業を実施しています。響ホールの自主事業は音楽祭と重ならないように秋を避けて行っていますが、それだけにとどまらず小学校や他文化施設へのアウトリーチ事業、美術館や博物館で他の施設と連携した事業を開催するなど幅広く展開しています。

話を国際音楽祭に戻しますが、北九州国際音楽祭は88年の創設当初からボランティアの運営参加によって支えられてきました。「ボランティアの会」ができたのが87年と聞いております。当時の音楽祭は今と違って一週間程度の期間に同一のアーティストが滞在し、行われていました。当時、市内にある5つの市民会館、小倉、八幡、戸畑、門司、若松でしたが、その5箇所で、滞在しているアーティストの編成を変えたり、いろいろと工夫しながら一週間位、連続してやっていたという感じでしょうか。

そのため当時のボランティアさんのお仕事はコンサートの裏方はもちろんですが、ホテルでアーティストのお世話や、さらに着物やお花など日本の伝統文化を教えることもされ、来日のアーティストには非常に好評だったと伺っています。当時からチケットの販売にもかなりボランティアさんが頑張っていたそうです。

最初に申し上げたとおり、この音楽祭がフィンランドの“クフモ室内音楽祭”の姉妹版として始

まりましたが、本家クフモの音楽祭の方も現地のボランティアに支えられていたようで、その慣習に習って発足したと聞いています。

当時は「北九州国際音楽祭ボランティアクフモの会」という名前で活動していました。フィンランドと市民レベルの交流も行っていたようです。現在は音楽祭の形も変わりましたが、今でも当時のメンバーが「北九州国際音楽祭ボランティアの会」のメンバーとして、コンサート当日の会場スタッフやチケットの販売にも携わっていただいています。

音楽祭は私ども実行委員会で開催していますが、ボランティアの会代表の方が実行委員会の理事の1人で、実行委員会理事会にも出席をいただいております。つまりここでボランティアの会としても運営に意見を言えることになっています。

本日の研修会で、ボランティア団体についていろいろと発表して欲しいと云う要請でしたが、私はボランティア側ではありませんので、「ボランティアの会」代表の方や、ベテランのスタッフさんに話を聞いてまいりました。簡単ではございますがQ&Aの形で発表したいと思います。

まず人数ですが30名弱登録していて、そのうち積極的に活動している人が15名程度ということです。活動内容は音楽祭コンサートの当日業務を響ホールでおこなっていただいている外に、チケットの販売もしていただいています。個人でチケットを購入してホールに足を運んでいただく方も沢山いらっしゃいます。チケット販売に関しては、販売していただいた額の10%を販売手数料として私どもから「会」のほうにお支払いしています。これが「ボランティアの会」の活動費用になるかと思いますが、実際には、そのチケットを購入者に書留で郵送する、チラシを送るというようなことで、チケット販売の収支は「トントン」だと聞いています。

活動の様子を簡単にご紹介します。今年の音楽祭ではコンサートで配布するチラシの折込み作業（挟み込み作業）たぶん皆さん経験された方結構多いと思いますが、同じところをぐるぐる回ってチラシを折り込んでいく作業で、この作業に限らずすべて財団のスタッフと一緒にやっていますが、特にこのチラシの折込み作業は、入場者の多い公演になると1時間以上腰をかがめて回らねばならず非常にしんどい作業でございます。次にホールが開場しますと次はパンフレット渡しです。これは来場されたお客様に笑顔でパンフレットをお渡ししていただく作業ですが、ホールの入口はお客様にとって非日常の空間でありコンサートへの入り口ということになりますので、おもてなしの心をもって対応しております。この他にもフロア係といって、ドアのタイムリーな開閉を担当します。お客様を自席にご案内したり、終演後は忘れ物のチェック、このほか机など使用した物品の撤収作業まで一緒にしています。

次に現状での問題点を聞きました。

一つは、インターネットの普及によりチケットの販売が大変難しくなっているということでした。どこのホールも劇場でもそうだと思いますが、当音楽祭でも2010年にインターネットによるチケット販売システムを導入いたしました。これによってお客様側としては24時間インターネットで、自分で座席を選んで購入できますし、受け取りも近くのコンビニでできるから利便性としては非常に向上したものと思っています。実際にオンライン販売のチケットの数（会員の数）は毎年増え続け、スタートした2010年に比べて2013年今年、先週までの数字ですが、約3倍にオンラインチケットの会員数が増えています。

一方でボランティア団体によるチケット売り上げは、チケットシステム導入前の2009年には全体売上の11.6%でしたが導入後の2012年、去年の実績ですが7.3%まで落ち込んでいます。ボランティアさんの話では、以前購入してくれた人にまたお願いしようと声をかけても「インターネット

で買ったからいいよ」と言われることが多くなったそうです。インターネットのみが原因ではないとしても、減少傾向にあるのは間違いないのかなと思います。しかし逆を申しますと、インターネット全盛の時代に昨年でも約7%のお客様がボランティアのかたからチケットを買っているということは、凄いことかとも思います。

当音楽祭のお客様は高齢の方が非常に多いので、昔からのボランティアさんから買い続けて下さることも7%キープできている要因の一つかとも思います。去年のアンケートを調べてみましたら、当音楽祭はリピーターの方が非常に多くて11回以上来ている方が全体の約4分の1、毎回、25回連続で来ているとお答えになった方が9%、約1割いらっしゃいます。まあボランティアの方による券売の例も7%、25年間来続けている方も9%、推測ですが多分ボランティアさんから買っているのではないかと今回改めて数字をみて思った次第でございます。

次に問題点の二つ目としてお答えいただいたのが、午前中の話にも出ましたが「ボランティアの会」への新規入会者が非常に少なく、メンバーも高齢化してきたと言われました。これはボランティアメンバーに限ったことではなく、音楽祭に見えるお客様も非常に高齢の方が多くて、昨年こられた方の年齢層ですが、60代以上の方が約半数、50代以上を含めると約6割ということになります。この傾向はコンサート全体の課題なのかなと思っています。

高齢化、高齢化と言いますが、北九州市自体非常に高齢化が進んでいる都市で、全国の政令都市の中で堂々全国第一位になっております。同じ政令都市福岡市高齢化率18%は全国的にみても非常に低いとはいえ、北九州市の25.5%はいかに高齢化が進んでいるかということがお分かりかと思えます。それを踏まえて先ほどの音楽祭に見えた年齢層のこともさほどおかしな割合ではないのかなという気もします。この高齢化についてボランティアさんと話をしていた時のエピソードを一つ紹介します。

「ボランティアの会」の代表が、最近では毎年「来年こそは活動を辞めようと思うのです」と言われました。こちらはてっきり、やはり高齢になって、折込みやコンサートで半日以上立ちっぱなし作業が大変なのかなと思いき、「やはり体力など大変ですね」と聞きましたら、「何を言っているのだ、そんなことではない」「体力は全然余裕だが、ただ自分達の様な年寄りがコンサートの会場で仕事をしているのが、お客様から見てもみっともないのではないか」と言われました。私は驚いて、「そんなことを思ったこともありません」と。逆にこちらからお伝えしたのは、「日本全体が今超高齢化を迎えつつある社会で、高齢者もどんどん社会進出しているいろいろなことをされる時代です。お手本になるように堂々と活動してください」と申し上げました。我々はボランティアスタッフを動かす立場で、一応プロとしてコンサート業務をやっていますが、25年も続いているものはいません。そういった意味で、私たちは学ぶものも非常に多いのではないかと考えています。

話を聞いて思ったことは、今までボランティアの方も大変だろうなと思いき、「座ったままの作業でいいですよ」と申し上げてきましたが、これからは遠慮なくどんどんお願いしようと思った次第です。

「ボランティアの会」の方も長い方は26年間続けておられるので、「どういったモチベーションで続けていますか」とお尋ねしたら、出てきた答えがこの二つでした。一つは、「とにかく音楽が好きだ」二つ目は、「響ホールの良さをもっと多くの方々に知って欲しい」でした。

響ホール自体はボランティアの会より歴史は短いのですが、その良さを知って欲しいという、ほんとは私たち運営しているものが一番それを考えなければいけないことですが、市民であるボランティアの方々にホールが愛されており、このように思っただけすることは非常にありがたいことで、この事業を担当していることを非常に誇りに思うとともに、我々ももっと頑張らねばならないと思

った次第です。

実は北九州市には「北九州国際音楽祭ボランティアの会」だけではなく、他にも複数のボランティア団体がありまして、国際音楽祭に限らず、響ホールや他の文化施設、劇場等、あと民間主催の事業、それぞれの自主事業でも活躍しておられます。これからは官も民も思いは同じだと思いますので、協働やそれぞれ活動により北九州市の音楽文化を共に支え盛り上げていきたいと思っています。

以上で私の発表を終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

司会： ありがとうございました。佐藤さんの発表の感想を申し上げます。

25年間、四半世紀ですからね。四半世紀の歴史を持つボランティアは佐藤さんもおっしゃっていましたが、財団の職員でも25年間音楽祭をやってきた人はいないわけですね。そういう意味でも稀有な人材の宝庫というか、蓄積があって、ボランティアだからといって「ただ使う、使われる」ということよりも、その経験から学ぶことのほうが、財団の職員さんも多いのではないかなあ、と思ったりします。

確かに超高齢化時代をどこの地方でも迎えるわけですが、その中でも先端に行く、文化ボランティアのモデルになっていただければ、と思います。先ほどのボランティアを長く続けてこられた方も、「年寄りが前にでていくのはみっともないのでは」というふうにおっしゃっていた話は、非常に印象的な話ですが、私もアメリカに行っていたときに、コンサートホールでおじいさん達がほんとに立派にかっこよく「もぎられている姿」が格好いいなー、と思いながら見ていました。

かっこいいお年寄りが活躍される様子を今度の演奏会では、演奏と併せて、ボランティアの皆さんの活躍を眺めるのも、9000円払う価値があると私はみました。是非ご覧ください。

司会： 続きまして筑紫野市文化会館 手島さま、よろしくお願ひします。

「筑紫野市市民劇の取組み」

筑紫野市文化会館

館長 手島 博 氏

始めに、筑紫野市は人口10万、福岡都市圏の南端に位置し、筑紫野市文化会館は開館後築29年の単館で800席の大ホールと120席の小ホール、それから会議室等がありますが生涯学習センターや、図書館とかそういった類は別でございます。夜になると真っ暗闇なところで、如何にして人を集めるか、関心をもたせるか等、市民とのつながりをつくるのが大きな課題です。

運営は公益財団法人筑紫野市文化振興財団で、以前は筑紫野市管理公社という名前の財団法人でした。市の指定管理を受けまして5年、非公募で、2回目の指定になります。この4月から公益財団法人になり名称もこの際もっと文化の香りのする名前に変えようと市に頼みまして、文化振興財団という名称に変更しました。正職員が3名、嘱託が3名、私も嘱託の一員で、計6人という小さな世帯でございます。

昨年の指定管理料は7500万程度で、管理費や人件費とか全部引いた残りの700万程度で事業をやります。入場料収入としては千数百万ぐらいで、年間大体20本から25本ぐらいの自主事業をやっています。もちろん貸館などもやっていますが公演事業などはやっていません。買取り公演は1回あたり500万～600万かかり、年間予算全部が飛んでしまいますので、極力そういうことは福

岡市や大きいところに任せて、なるべく我々の身の丈でやれる、地域市民に密着したイベントをやっています。

子ども会館の事業ですが、先ほど申しあげましたようにスタッフが6人ですから大きなイベントはとても人が足りない、ということで2003年にサポーターズバンクを立ち上げました。これは文化会館独自のボランティアを市民から募るということです。現在9年目を迎えました。今年また少し増えますが、今41名の登録者がいらっしゃいます。登録者には毎回イベントの度にはがきを出して、協力すると手を上げた方々に来て頂いています。

これはどこでも同じだと思いますが、公演のときの受付業務、もぎり、後片付け、チラシの折り込作業等をしていただきます。この数年もっと積極的に関わりたいという声が出てきたので、文化会館には市民公募事業というのがございます。この事業は何らかのイベントをやりたい人に、会場使用料は無料で若干の補助金も出しています。この事業に数件の応募があります。その選定作業にもボランティアの方に参加していただき当事者意識をもっていただいています。

全41名中女性が71%と圧倒的ですが、男性も最近リタイアされた団塊世代の方々がぼちぼち入ってこられて積極的にやっています。看護師の方や自営業の方とか様々な方がいらっしゃいます。先日、陸上自衛隊第4音楽隊のコンサートの時には15人の方々が来て頂きましていろいろお手伝いをしていただきました。

サポーター自体が組織化されているのではなく、あくまで私どもが直接皆さんにお願いすることですが徐々に盛り上がってきて、忘年会がどうかとか、スタッフも一諸にとかですね、そのようなこともできるような雰囲気にはなっています。皆さん方ボランティアですが、一応サンクスカードという地域通貨ではありませんが、文化会館が主催する事業については1枚500円のカードを渡しまして、これを使って見に来てくださいというようなことで利便を図っている状況でございます。

タイトルの市民劇に戻りますが、まず2010年私どもの会館が25周年を迎えるにあたり何かやろうということで、市民劇をやりたいという前々からの想いがありました。そこで2008年の5月、丁度文化協会が創立25周年、「ちくしの子ども劇場」が30周年ということでしたので一緒にやりませんか、同じように地域で文化に携わっている3団体、協同でやりましょうよということになり、第一回目の市民劇の準備を始めました。

皆で脚本作りから団員募集までやりまして、第一回目がパープルバレンタインというサブタイトルつけまして、2010年の2月14日に本公演を昼夜2回行いました。

それには「筑紫野ロマン飛行を楽しく成功させる会」を立ち上げ、子ども劇場、文化協会、それから市の方々も巻き込んでみんなでやりましょう、というところに声をかけました。演出や演劇の指導は太宰府に拠点を持つ、九州は初のプロ劇団でもあります「劇団道化」さんをお願いいたしました。衣装デザイン等はバレエスタジオの方、振り付けも文化協会の方、そして大道具は子ども劇場さんや人形劇団の地元の方々にお願いしました。地元の九州産業高校の美術部さんも大道具を、衣装小道具は子ども劇場の方がやってくれました。

子ども劇場というのは先ほど文化庁の方もおっしゃっていましたが、子供のために文化・演劇、生の舞台を体験させようということで組織があると思いますが、「ちくしの子ども劇場」も会員が450人ほどいまして、非常に活発にやっています。

こういう演劇にもノウハウをお持ちですから、一緒にやらせてくださいということでご協力いただき、大きな戦力として市民劇に協力いただきました。

活動記録等は地元の筑紫野ビデオ倶楽部さんに協力頂きました。これは全部、ボランティアで

緒にやりましょうという枠組みの中で参加いただき、一回目の市民劇ができました。この経験を踏まえて、市の方からも再演要望の声を聞き、「じゃあやりましょう」ということで2回目を昨年、2012年4月にやりました。これは丁度筑紫野市政40周年になる節目の時でした。それから長崎街道という江戸時代からありました長崎から小倉までを繋ぐ街道が、開通400年を迎え、筑紫野市にはたまたま山家宿と原田宿という2つの宿場があり、それを記念するイベントが企画されていたので、連動してやりましょうということになりました。財政的にも厳しい状況でしたので文化庁、あるいは地域の方の支援や補助金を得て取り組んだ、という流れです。

プログラムの内容になりますが、ここで大きなのが1回目の経験を踏まえて、ボランティアにもっと積極的に取り組んでいただこう、ということです。1回目の市民劇のとき、地域というネットワークを繋いでみんなの力でやりましたが、それをベースにして、さらに2回目の再演時にはボランティアというものをもっと意識して組織化していこうということです。早速サポーター部会という組織を設け出演者も公募しますが、サポーターも公募しました。

ここでは子ども劇場のお父さん方とか、サポーターズバンクの方とか、それから一般市民で関心がある方とか、そういった方々にずいぶん手を上げていただきました。このサポーター部会には劇制作支援もあり、広報活動支援もありますし、稽古運営支援もあります。

1回目の時もそうでしたが舞台転換やいろいろな大道具とか小道具とか使い、大掛かりな作業をするときは“ザ・裏方”というロゴが入った共通のTシャツを作り、皆さん着ていただくことで後方支援をしていただきました。皆さんすっかり仲良くなって公演のあとは自分達だけで飲み会をやって盛り上がった、という話も聞きました。そのようにいろんな繋がりが広がって出来たと思っています。そしてサポーター部会の具体的な活動は、稽古受付・衣装・小道具・団員写真撮影・広報活動で、協力いただいた方はすべて名前を出すことで一体感を作るといいますか、そういう気持ちでやっております。

それから、ストーリーは地域の歴史を掘り起こそうという発想です。筑紫野市は新・旧住民の落差が結構あり一体感に欠けるということで、地域の歴史を皆さんにもっと知っていただきたいと思い、その歴史をストーリーに織り込んで物語を展開させることにしました。

公演の軌跡でございますが、地元には少年少女合唱団がありますが、この子達にも参加してもらい、オーディションでキャストを発表して、それから練習を続けていくということで、とにかくネットワークを広げ、たくさんの方に関心を持っていただく、そしてその大きな一つの核としてボランティアの方々にも頑張ってもらおうというようにしました。この時は総勢47名になっていました。

サポーター部会ではいろんな作業をしていただきましたが、JA 筑紫さんのほうにも声をかけまして、いちご・いちじく農園の方にいちごを提供していただきました。それを材料として地元の洋菓子屋さんに特別お願いして舞台上で使う小道具の1つで「いちごのティラミス」春1番“ ”というお菓子を作って貰いました。色々な作業もお願いしましたが、全部タダでいいですよと快く協力いただけました。

それから昔の筑紫野の歴史にも出てくる「古代官人」の衣装をどうするか、小道具をどうするかということになりましたが、それもサポーター部会の方々が全部担ってくれ、当日は多くの子供が出演しましたが、衣装を準備し、裏方のほうでその子達の着付けも担ってもらいました。

この市民劇は1000万円近い予算で我々としては身の丈を超えた大きな取り組みで、金銭的なことも大変でしたが、それは、文化庁や地域のいろいろなどところのご支援をいただく、という方法で取り組むことができました。それから、我々自身が大きなポテンシャルをもって頑張るといってもありますが、何よりやはり地域と結びついて地域の方々を巻き込んで、それから市民・ボランテ

ィアの方々のエネルギーをもらう、そのような支えが無ければとてもこういう大きな取り組みはできないと思っています。

この取り組みに関わった市民の方が、また「サポーターズバンクに私入るわ」ということで入ってくるという良い循環も出来てきたと思います。

問題は今後どうするか、せっかくやった 2 回の市民劇も、体験・取り組み、そこでできたネットワークをどう繋いでいくか、どう広げていくかということだと思います。

それにはやはりさらにいろいろな取り組み、数多くの事業をやっていく中で、これまで以上に市民にとって文化会館が身近な存在になり、親しく足を運ばれるそのような関係性を作っていくことが大事で、これは不断の努力だと思います。

いずれにしてもこういう大きなイベントをすることで我々スタッフも育ちますし、また市民の方々も育つ、あるいは喜びを感じるということですからやっぱり何かしなくてはいけないといいですか、今まで通りの普通のことをルーティンのようにやっていくという作業ももちろん致しますが、それ以外にもなにかインパクトのあるものに取って代わり取り組むことにより全体のエネルギーを上げて、さらに繋いで広げていく作業が必要だということを感じているところです。

昨年そのエネルギーを使いすぎましたので本年度はちょっと優しくのんびりしよう、と今年は準備・休養期間としています。

来年はまた文化会館、開館 30 周年を迎えますので「市民第九の合唱団」を作り上げて 12 月の忙しい時期ですが、第九を歌うイベントをやっていこうと考えています。これには九響をお呼びして、指揮者の大友直人さんにも来ていただきたいと思っています。これにつきましてもまた市民の多くの方に歌っていただきたいし、大きなボランティアの力を借りて是非成功させたいと思っています。駆け足になりましたけども以上でございます。つたない発表ではございましたがありがとうございました。

司会 : ありがとうございました。筑紫野市文化会館さんは私も事前に少しお邪魔しましたが、郊外にある市民会館で、特段何かすごい特徴をもっている会館というわけではないのですが、お話を聞いていた中で、この市民劇の取り組みはほんとに地域の資源といいますか、文化資源という言葉方を時々しますが、すべて総活用しているな、という印象ですね。人材もそうですが、お菓子屋さんがでてきたり、地域の産業まで取り込んで、それもいろんな化学反応が起きたり、波及効果が生まれたりとか、そういった地域文化資源が総活用されているなあという印象を持ちました。ありがとうございました。最後になりますがサザンクス筑後さんお願いします。

「サザンクス筑後の人材育成」

(公財) 筑後市文化振興公社

サザンクス筑後 管理事業係長 久保田 力氏

こんにちは。サザンクス筑後の久保田 力と申します。

私ども筑後市文化振興公社は本年度の 4 月 1 日から公益財団法人としてサザンクス筑後の管理運営をしております。実は、先週火曜日のこの時間に指定管理者のコンペがありまして、その状況を出させるような本日のこの雰囲気の中で、やや緊張しながら喋ることになるかと思っております。どうぞ暖かくご静聴いただければと思います。

サザンクス筑後は「市民に愛される施設」「市民創造の発表の場」「人づくりの場」「筑後地区の芸術文化の発信基地」を目標に設立され、来年 20 周年を迎えます。まさに今日、劇場法の説明の中にもありましたように、発信基地としての役割を果たしていきたいと思っています。サザンクス筑後は人口 4 万 9 千人の筑後市に設立されました。

私どもの事業をご紹介しますと、市民参加による質の高い育成・参加型講座、そのなかには専属劇団、子どものための演劇広場、バイオリン講座、アナウンサー講座、アシスタント養成講座等々があります。また市民参加による文化サークルや、情報発信基地としてインターネット TV サザンクスを開局、新しくホール・レセプション講座など市民の方々によるボランティア講座もあります。さらに館外へ飛び出すアウトリーチ事業などを私たちの顔として実施しております。

来年度が先ほど申しました通りサザンクスが 20 周年、筑後市が市制 60 周年迎えるにあたり、3 つの事業に取り掛かっているところです。私どもはこのような育成ばかりやっているわけではありませんが、育成は私たちのこの 20 年間のミッションであり、私たちがやってきた成果でもあります。

鑑賞事業には、いわゆるメジャーの方も呼び出して、(昨日は渡辺貞夫さんのクインテットのコンサートが、贅沢にも 150 名限定で聴けるといふ鑑賞事業を夜遅くまで行なってきたところ) 買い取り、あるいは共催で年間 8 本から 10 本ほどやっている状況です。こういう催しで全国からお客様を招き、筑後市という名前を知ってもらふ目的でメジャーなものもやっています。もちろん地域の方々にも喜んでいただくためでもあります。

ちなみに、サザンクス筑後には 1300 席の大ホール、500 席の小ホール、研修室等がございます。この人口 4 万 9 千人の町でこれだけの規模のホールを持っているところは他にないようにも伺っております。こういったホールの中で管理運営をしています。もちろん貸し館事業もあり、これに関しては年間稼働率が 90%~80%と、結構高いほうの劇場になるかと思えます。

先ほど申し上げました育成事業、人づくりの事業ですが、代表的なものは筑後市民ミュージカル「彼方へ、流れの彼方へ」という作品を、平成 16 年の国民文化祭の時に制作しました。それ以降も続けておまして、来年 26 年度は会館 20 周年に改めて上演したいと思えます。22 年度には東京公演も行い、この時は市民 100 名・スタッフ 20 名・保護者 20 名・副市長 1 名と、150 名余の規模で東京に出かけ大変喜ばれました。これは私どもがやっている大きな事業の一例です。人づくりの観点から、ちょっとここは自慢話になりますが、平成 22 年度に総務大臣賞、地域創造大賞を受賞いたしました。地元九州大谷短期大学という演劇・放送を中心にやっている大学がありますが、ここの連携も含めて市民と一緒に人づくりをしてきたことが認められたということです。

次に私どもの職員体制です。先ほどの筑紫野文化会館さんは 6 名とおっしゃっていましたが、私共も事業を展開するには当たっては、事業係が担当しますが大変厳しくて 4 名で様々な事業を展開しています。本来であれば、これだけの事業の 1 コマを担うのが適当かと思えます。PR とかマネジメントとは本来、局があってもいいぐらいの規模の事業になっていると思っています。実のところ 4 人でヒーヒーいいながらやっている状況です。そういった中、支えてくれたのがボランティアによるレセプションです。

市民ボランティアの育成については、平成 6 年に会館がオープンしましたが、実は開館以前から育成をおこなっておりまして、そして開館から平成 22 年ぐらいまでこういったステージ・サブオペレーター、いわゆるどこの劇場でもされていると思えますが、バックテージやアナウンサーといった表方でナレーションを入れたり、陰アナといった業務には当初行政の者が当たっていました。

そんな中で SOAC という、いわゆるサザンクス筑後付きのボランティアクラブもでき、しばらくの間はその方々を中心に私どもの活動を支えていただき事業を展開していきました。その後、国民文化祭が開かれまして、この時がボランティア育成の第 2 期になります。

サザンクスでは「全国太鼓の祭典」と「ミュージカルフェスティバル」をやりました。初めての大きな事業だったので、この時ボランティア募集を呼びかけて拡大をしていきました。この時は全国から太鼓が 20 団体、ミュージカル団体も 4 団体お呼びしての事業でしたから、ボランティア登録が 300 名 20 団体とたくさんの市民の方にお手伝いいただいて、国民文化祭を無事終わりました。

実は私、2010 年に行われたこのボランティアフォーラム時も事例報告をさせていただきましたが、その時に紹介したのが、地域通貨という劇場通貨のことでした。これはお金ではありませんが、会館名が「サザンクス」で「市の木がくす」なものですから 1 円当たり 1 クスという単位で、ボランティアに参加いただいた場合、一時間当たり 800 円を 800 クスでお払いするという地域通貨制度を作ったのがこの時です。利用方法は主催事業のチケット購入、主催講座の受講料、施設の利用料、そして緋グッズ（バッグや名刺入れ等）これは筑後ならではの特別なものです。このようなものをご購入いただけます。ということで地域通貨を作った次第です。もちろん今も続いています。

実はここからが今日のお話になるのですが、もう 20 年近く経った中でいろいろな課題も見えてきました。2 年前の 23 年度に課題として出てきたのが、国民文化祭を契機にたくさんの方々にボランティア登録していただきましたが、実働者（実際の活動者）は大幅に減少しており、ボランティア登録の見直しが必要です。さらに地域通貨、これは劇場内通貨になっていたのもっと市内にも広げていくような見直しをしなければと思いました。

設立当初にできたボランティアクラブ SOAC、先ほどもボランティアの高齢化や、その良し悪しなどいろいろな意見は出ていましたが、着実に高齢になり、足が動かなくなってきた方々もまだ活動を続けています。若者がいないというよりも年寄りのクラブに、もう人が集まらなくなってきている状況で、今後この SOAC が私たちのサポータークラブと一緒にやっていくか、ということも課題でした。

そこで改めて平成 24 年度に「ホールボランティア養成講座」を改めて立ち上げました。どのような講座かという、ボランティアを有償で、即ち費用をお支払いして、鑑賞事業の時の受付あるいは会場係などをしてもらうことです。但し、お金を払う代わりにきちんとした教育研修もおこなうということで、全 10 回程度にわたりいろいろな接遇ですとか、あるいはサザンクス筑後の歴史ですとか、ひいては一から始まる劇場の歴史など、1 年間に亘り勉強していただいたのが 24 年度です。幸いにも 25 年度もその方々が数多く継続してくださって、講座名も改め「ホール・レセプション研修講座」とし、専門的には笑顔の作り方からお辞儀の仕方、チケットのもぎり方、どっちを向けてチケットをもらえばいいのか等細かいことまで含めて、専門の先生方をお招きして、少し高齢化している SOAC の皆さま達と共に市民の皆さんにも参加いただいて、この講座を作っている状態です。

今年度はさらに専門的な講座だけでなく、もっと文化教養レベルの事業を市民の方々に理解いただきたいと考え、ミュージカルとか、今日も参加されている古賀弥生さんにも研修で講演していただく他、ボランティアの意義を学んだり、年明けには野村万作の事業も控えています。こちらでは来ていただいた市民の方々に向けワークショップも考えています。

実は「ホール・レセプション研修講座」の応募者数ですが、一般のかたが 19 名、通貨登録者いわゆるクスでダイレクトメールやいろいろお手伝いいただいた方が 7 名、市民ミュージカル出演者の方々も 18 名ボランティアに登録をしていただきました。主催講座の保護者のお母様がたが

10名ほど、近くの八女工業高校の生徒さんが3名、先ほど言いましたSOAC15名で計72名のかたの応募がありました。2年かけてこのような研修を行いながらその後、受付等の業務に立っていただいています。

我々もサザンクスらしさ、筑後らしさをだしたいね、という思いでユニフォームを作りました。久留米もそうですが筑後も緋の里ですから近くの緋工場に頼み、来ていただく皆さんを心地よくお出迎えしたいと考え、緋ベストを作りました。ちなみに男性のレセプションには、私が今着けています緋のネクタイを、実はこれ5500円しますが、やはりお客様をお迎えするにはきちんとした身なりマナーをということで、ユニフォームもきちんと整備しながらボランティアの方を養成しているところです。

実はこれから人づくりの話です。ここに応募された方々に、実は今日私が一番言いたいところでありまして、もちろん以前からのボランティアさんもいらっしゃいますが、今までは表現者、いわゆる舞台上に立っていた皆さんが実際にこういったところにも力を発揮してみたいとか、先ほど子ども達の事業をいろいろやっていると仰いましたが、そこに出演していた子ども達のお母様が、子どもが長いことお世話になり最近は少し手も離れたから、今度は私達がサザンクスに恩返しと思っ、「今回は協力しましょう」と快く10名の方に登録していただきました。

私たちのサザンクス筑後は復興支援事業もやっています。東北の震災以降5回ほどおこないまして250万ほど義援金を送りました。筑後にある「おっちゃんバンド」(ビートルズのコピーバンド)の皆さんにご協力いただいて、チケット料金はすべて東北に送るという形でやっております。先ほど有償と言いましたが、こういう支援事業や育成事業の本番発表時は、市民のレセプションの皆さんには無償でボランティアに来ていただき、快く受付等をしてもらいます。これはちょっと余談ですが、東北でおこなわれている支援ネットワーク会議にも出かけ、情報もきちんと報告しながら事業をおこなっているところです。私どもの歴史は人づくりの歴史ということになります。

私達は、「市民創造の場」「人づくりの場」がサザンクス筑後であると捉えていますし、そこが心の変革の拠点となり市民の方々にとっての充実した場所であることを私たちはとても大事に思っております。参加型事業・育成型事業とよんでいます。筑後市民ミュージカル「彼方に、流れの彼方に」へ参加した方々は16年からずっと参加し続けています。こういった方々が私達の支え手になっているのです。また、「こどものための演劇広場」これも平成10年から続いていて、生きる力の教育として年に2回の公演発表会を行っています。今年15周年を迎えますが、この子達がだんだん大人になっていきながらサザンクス筑後の支え手になっていったという経緯もあります。

その他、当初からあるアナウンサー講座や、いわゆる舞台の裏方の講座も15年間続いていますし、最近23年からですがサザンクス筑後のフランチャイズの劇団、専属劇団を作って、年に2回の自主公演として出前公演をおこなっています。

最近、私たちは地元サザンクス筑後の中だけではいけない、やはり私たちは地元サザンクス筑後ということで筑後市のPRとか、サザンクス筑後のPRを兼ねて小学校とか私立病院だとかいろいろなところに館外事業として出かけています。

筑後市は「恋のくに」と名乗っていますので、私どもで「サザンカ6」という女性アイドルユニットを作り、様々なお祭りだとか幼稚園・保育園、来年は施設の慰問も含めてがんがん呼びかけていこうという事業もあります。

さらに、アウトリーチ事業では、表現・コミュニケーション・演劇・ダンス体験の事業を小学校中心におこなっています。筑後市内に11の小学校がありますがその中の10の小学校にて今年度全部で139時間、先ほどの育成したスタッフと私も一緒に出かけて行き表現教育、コミュニケーション

ン能力の育成に励んでいるところです。

先ほど大澤さんも指定管理だと、そこに居なければならないとかおっしゃっていますが、私たちはそれに逆行する形で年間の半分はおそらく館外活動に費やしているのではという位、館外事業を大事にしています。

なぜなれば子ども達の未来や筑後市の未来を創るのは子ども達だ、と捉えているからです。

その子ども達がなかなかサザンクス筑後に来る機会が少ないのです。それでは自分達で出かけて行って、顔を繋いでおき、「いつでもいらっしゃい、スタッフが待っているよ」というふうな感じで、それから子供達が入り出す機会も多くなっています。逆に私たちは筑後市内では悪いことはできないというか、コンビニで立ち読みしていると「あれ、力さんやない？」という声が聞こえてきたり、ちょっと自転車で必死になって走っていると「チャリで行きよったね」とか、そんなことで筑後市内では悪いことはできない状態にもなっています。

筑後市内の小学生の児童数は3000名です。延べ人数で1年間に3500名の児童がワークショップを受けていることとなります。おそらく全国的にみてもこの規模はなかなかないのではと思っています。

まとめとして、こういった人づくりの事業について、先週古賀弥生さんにボランティアの講座をお願いしました。その中から引用させていただきます。

その講座のまとめで、下からみる1番から2番3番という段階の話、いわゆる、もぎりとか場内案内など割と単純な「公共施設における補助的な活動」(1番)、そのような活動からもう1段階グレードアップを目指し企画運営などに関わりたいと思う方に、「運営主体とパートナーシップがとれる活動」(2番)、さらに文化施設云々に関係なくより積極的にやりたい方に「地域文化を創造する自立した市民活動」(3番)とこのように分類していただきましたが、今日の話の中身のことでないかと思いました。私たちは20年経ってやっと1番か2番か3番を行ったり来たりしながら模索している状況かなと思っています。

20年たってやっとこの状況ですから、筑後市では筑紫野市さんや北九州市さんのように、自分達がやりたい、やろうという人がなかなか見えてきません。サザンクス筑後に先ず人を集めて、あるいは私たちが出かけて行き、そこで人を創っていくことがこれからの事業かなと思っています。子供達のところに出かけていくのも子供達があと10年20年経ったときに何かサザンクス筑後にという想いがきつと生まれて来るだろうと思っていますし、いろいろな事業はそういう形で人を繋げていくという意味でやっています。

これからのことですが、実は子ども達の事業がもう15周年を迎え、来年3月には「100万回生きた猫」というミュージカルを子供達が演じます。筑後市内の小学校合同鑑賞会を10年間続けています。これは1・2年生、3・4年生、5・6年生と階層を分けて、必ず年に1回全ての小学生がサザンクス筑後に集い、舞台芸術を鑑賞する機会を作っています。いよいよ10年目にして私たちの市民劇団がその子ども達に向けての公演を催します。今までは東京大阪等からプロを呼んでいましたが、校長先生とも話し、これなら大丈夫とお墨付きをいただいたので、7月に初めておこなうことを考えております。

この他開館20周年なので児童オペラを8月に上演したり、10月には先ほどの「彼方へ・・・」を2014版としてリメイクしたり、筑紫野市さんも言っていました、実は私どもも「第九」と「いのちの祝祭」を11月にと目白押しです。こういった市民劇の市民への関わりによる表現活動をこの節目に見直しながらやっていこうと考えているところです。

最後に、私が思うのは、市民の方々が自己表現する、自分達が舞台で何かを創るということを通

して文化を考え、感じて頂いていると思っています。自己実現してもそれに見返りが無いのがボランティアという言い方がどうか分かりませんが、サザンクスからみればこのような人づくりが私たちのミッションであるので、市民の皆さんがそこで表現し創造し、裏方としても活躍し、これこそが私たちにとってのサザンクス筑後を体現していくことですから、そういう意味において文化ボランティアという形で、サザンクス筑後に出入りしている皆さん方と一緒に創っているところです。以上です。ありがとうございました。

司会：ありがとうございました。3団体それぞれで、最後のサザンクスさん本当にいろいろなことおやりになっているのには驚きました。なかでも緋のベストとネクタイほんとに素敵だなと思いました。あとでちょっとゆっくり見せてください。それに、うっかり久保田さんが外を走っていると子ども達から、「チャリンコで急いどる」みたいな話になり、悪いことはできないとおっしゃっていました。文化ボランティアが活性化すると治安の向上や犯罪の防止にも役に立つ素晴らしい事例でもあると思います。